

## 古川孝順先生、お疲れ様でした

高橋儀平\*

ライフデザイン学部の創設者である古川孝順先生が今年3月で定年となる。1年遅れてスタートした人間環境デザイン学科の私たちにとってもあつという間である。どういうわけか私が2代目学部長を引き継ぎ、すでに3年目を終えようとしているにも拘らず、先生の学部創設にかけた想いと情熱を十分に果たし切れていない。これは率直にお詫びしたいのである。これからも果たせないかもしれないが、その役割と発信の重要性を再認識しながらの毎日を慌ただしく過ごしているのが今の私の実情である。

私自身障害者問題に長年関わりながら、古川先生とはライフデザイン学部の準備に入るまではあまり接点が無かった。これには理由があって、1970年代の後半、私が障害者問題に関心を持って間もなく、社会福祉の分野では日本女子大学の一番ヶ瀬康子先生との出会いが先に来たからである。その結果、同じ社会福祉分野の先生についてあまり不自由を感じなかったことも一因としてある。学内では何度かお会いしていたのだが、何故かすれ違いが続いていた。正直に言うところとちよっぴり怖そうなので避けていたのかもしれない(笑)。

今となっては遅すぎたが、もう少し早く色々とお話を聞いていたらと思う。

ところが、新学部、新学科の準備を求められ『イヤ』でもお付き合いを開始するところとなった。当初の準備段階では、人間環境デザイン学科のカリキュラム、教員配置などで検討する時間があまりにも短かったので、無理を承知で1年延期を申し出た。3学科同時スタートを強く願っていた古川先生にとってとても身勝手な行動に思われたことであろう。今同様の立場に身を置くものとして今更ながら反省している。

2006年度からは人間環境デザイン学科主任として主任会議等で本格的にお話しする機会が増えたが、相変わらず準備段階から引き続き学科の要望ばかりに終始していたように思う。先生からすると、我儘で大変厄介な学科を抱えてしまったのではないかと、学部の行く末を案じていたのではないだろうか。

先生へのお礼の場をお借りして朝霞キャンパスに創設された「ライフデザイン学部」の意義を私なりに改めて問い直してみたい。ライフデザイン学部は、現代社会、現代都市、人間社会が抱えている様々な問題点を福祉、健康、環境という3つのキーワードで横につなぎ、深掘りし、時には社会環境や人間生活に役立つ資格へと結びつけることを学びの基本に据えている。人と人(グループもある)、人と環境(モノ、コト、生活環境)の関係性を捉え直し、再編し、再生し、創造する。そもそも人間生活の諸問題、諸課題は個々の専門分野だけでは解決できない。お互いの特長や弱点を補完し合う解決システムが必要であるが、このような遠大なテーマに対峙する場、果敢に挑戦する場として、日本の高等教育機関でとしては恐らくはじめてと思われるライフデザイン学部を古川先生が実践に移され

---

\* 東洋大学ライフデザイン学部人間環境デザイン学科 Toyo Univ. Faculty of Human Life Design  
連絡先：〒351-8510 埼玉県朝霞市岡48-1

た。こうした流れは、学部の開設と前後して先生らが編集された「エンサイクロペディア社会福祉学」(中央法規出版2007年12月)で具体的かつ体系的に理論構築を果たしている。私もその片隅に拙文を書かせていただいたが、人間環境デザイン学科も同様な展望と野望を持って設立をさせていただいた。

こうして創生されたライフデザイン学部における古川先生のご功績を次の5点に纏めてみた。

一つは、「学際」と「文理融合」の学び場を創設されたことである。

ここでは、社会福祉領域の広がりに伴う学際化と従来からの各専門分野の総合化の2面が目標にあるように思う。加えて理系と文系の緩やかな連携を目指しているのである。それぞれに解はないが、人間や社会環境への解の方法を多様化したと考えられる。

二つ目は教員研究費の配分方法を従来にないやり方で実現したことである。

各個人に配分される研究費の一部をプールし、学部全体で使用する方法を考案していただいた。結果的には30万円を各個人に公平に配分、残りは教授、准教授等に関わりなく競争で獲得するプロジェクト方式とした。このプロジェクトの目的は学部設置の理念にかなう学際的研究への支援である。新設学部だからできたという声もあるが、この効果は大きく、毎年のように学部独自で100～200万円単位の研究助成が学部内コンペにより可能となった。海外や国内の特別研究費もここから捻出されている。

三つ目は既存校舎の利活用を推進したことである。文系5学部教養課程の白山移転により空きキャンパスとなった朝霞校舎を地元朝霞市への支援も視野に入れながら活用した。新学部設置のための施設改修費は当然学部設置準備費で賄ったと思われるが、校地等の有効活用は大学財政にも大きく貢献したに違いない。準備段階での事業計画を早い段階で十分に達成したのではないかとみられる。

四つ目に、東洋大学大学院で複数学部を包含した独立研究科である福祉社会デザイン研究科を設立したことである。社会学部系社会福祉学専攻、Ⅱ部の福祉社会システム研究科とライフデザイン学部を基礎とするヒューマンデザイン専攻の合体は、ユニークで面白い。近そうで遠くない国々の関係とよく似ている。この弱みを強みに変える時期が到来している。

五つ目に、アジアとの福祉交流の土台を築かれたことである。

(社)韓日福祉経営協議会とライフデザイン学部、福祉社会デザイン研究科による教員、学生交流は毎年活発に展開され、帰国後の学生の評価もとても満足したものとなっている。そのことの影響を受けて、私の方では北京理工大学設計芸術院との学部間協定を実現させて頂いた。先生が学部長3年目の時であったと思う。

ライフデザイン学部はすでに創世期を終えて、発展期が到来している。これからのライフデザイン学部はどこへ向かうのであろうか、ご退職される先生もさぞやご心配されているに違いない。ここはやさしく、じっくりと見守って頂きたいと願いつつ、欲を言えばこれからのヒントが欲しい。「そんなことぐらい自分たちで考えなさい」と、先生はおっしゃるでしょう。深い洞察力と判断力が今にでも欲しい時がある。怠けものの私にはご退職後もいつでも叱咤激励を頂きたい。

最後に、先生はいつでもご健康ですが、さらにお身体に留意され、益々のご健勝、ご活躍を心からご祈念申し上げます。

2月25日記